

生徒の授業での言葉、
日常の会話が豊かになった

樋口 まず、言語活動に取り組みられた結果、生徒たちにとどのような変化が見られるようになったか、日常の様子を教えてください。

談議所 生徒たちには、多面的なものの見方、筋道を立てて論理的に話す力が身に付いていることを感じます。実際、授業の中でも、「他にもこういう見方があるのではないかと生徒が提示したり、「私はこう考えるけれど、他の人はどう考えますか」と尋ねたりするなど、グループ活動の良さを生かして活動できる生

先進校の

取り組みから考える

「言語活動」の成果と展望

新課程の全面実施から1年が経った。改善事項の目玉の一つである「言語活動の充実」は、生徒をどのように変えたのか。いち早く言語活動重視の方針を打ち出し、授業改革に取り組んだ2校に、その成果と課題を聞いた。

にしきがおか
石川県立金沢錦丘高校の取り組み

◎論理的・批判的思考力の育成を目指して2012年度にスタート

2004年度に併設型中高一貫校となって以来、進学実績の面では着実に成果を上げてきた同校は、知識の体系化に必要な論理的・批判的思考力を育成することで、学校全体の学力向上を図り、10年後、20年後の社会で活躍できる力を生徒に育むため、12年度から言語活動の充実に取り組み始めた。まず、「総合的な学習の時間」で、ベネッセの『表現トレーニング』を教材として使い、1年次では自分の意見を述べるために必要な力を育成し、2年次には身近なテーマをさまざまな角度から考察して自分の意見を整理すると共に、他者の意見を知ることによって表現力を高めていった。

◎英語によるディスカッション、他教科との連携も

また、学校設定科目「L C (Logical Communication) 探究」を設置し、プレゼンテーションやポスターセッションなどを行いながら、論理的・批判的に英文を読む力や、自分の考えを論理的に構成し、英文で書く力を育成している。更に、社会の事象に対する生徒の視野を広げるため、英語科と他教科との「コラボ授業」も実施。例えば、物理とのコラボでは原子力発電の是非をテーマとし、まず生徒は放射線や原子力発電の仕組みなどについての講義を受けたり、実験を行ったりすることで理解を深めた後、英語で自分の意見を発表するなどした。

そして、定期考査で全教科において論理的・批判的思考力を問う問題を出すなどした結果、個別学力試験に必要な記述力が高まり、13年度入試では過去10年で最高の国公立大合格実績となった。13年度からは石川県の課題発見力育成事業の研究指定校となり、論理的・批判的思考力の育成について、全国の実践例を基に更に研究を重ねている。

2013年6月号「指導変革の軌跡」で
同校の取り組みを紹介しています

徒が増えていると思います。1つの事象に対しても、人それぞれ感じ方が異なるからこそ、お互いの考えを持ち寄ることで、自分の考えをより良いものにしていう意識が生徒に根付きつつあります。

有木 本校に赴任して8年目になりますが、この間、生徒の様子は随分変わりました。些細なようで、最も大きな変化だと感じるのが、教師と生徒の日常会話が豊かになったことです。3年生に上がる頃には、大人と対話できる力を多くの生徒が身に付けるようになりました。

談議所 コミュニケーションが双方向で、豊かになったというのは私も感じます。授業中の教師の質問に対する生徒の答えが「単語」から「文章」になったのは大きな変化です。更に、質問に答える生徒の言葉から、相手に分かってもらおうという意識が感じられるのです。

有木 生徒たちの様子を見ていて、たくましく育っているなあと思う瞬間が増えました。授業でグループワークを行う時も、講義型の授業で

石川県立金沢錦丘高校
談議所啓輔
だんぎしょ・けいすけ



◎教職歴12年。石川県立金沢錦丘中学校などを経て同校へ。赴任して4年目。担当教科は理科。教務課に所属。

石川県立金沢錦丘高校

- ◎設立 1963(昭和38)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎13年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、一橋大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大などに155人が合格。私立大は、慶應義塾大、法政大、明治大、立教大、同志社大、立命館大などに延べ468人が合格。
- ◎住所 〒921-8151
石川県金沢市窪6-218
- ◎電話 076-241-8341
- ◎Web Site <http://cms1.ishikawa-c.ed.jp/~nisikh/NC2/>

広島県立忠海高校
有木克明
ありき・かつあき



◎教職歴16年。広島県立久井高校、尾道北高校を経て同校へ。赴任して8年目。担当教科は理科。教務主任。

広島県立忠海高校

- ◎設立 1886(明治19)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約80人
- ◎13年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、広島大、山口大、香川大などに11人が合格。私立大は、立命館大、近畿大、甲南大、広島修道大などに延べ115人が合格。他に、短期大12人、専門学校24人、就職者3人。
- ◎住所 〒729-2314
広島県竹原市忠海床浦4-4-1
- ◎電話 0846-26-0800
- ◎Web Site <http://www.tadanoumi-h.hiroshima-c.ed.jp/>

ベネッセ教育総合研究所
高等教育研究室 主任研究員
樋口 健
ひぐち・たけし



*プロフィールは2014年3月時点のものです

ただのうみ
広島県立忠海高校の取り組み

◎2005年度から全教科で言語活動を取り入れた指導を研究

2005年度から3年間、広島県教育委員会「ことばの教育」研究校に指定されたことを契機に、学校全体で言語活動を導入。地域の小・中学校と連携し、各教科における「ことばの力」を土台とした指導方法の工夫・改善について研究した。07年度以降、現在まで「総合的な学習の時間」や小論文指導、教科学習と、学校教育全体で言語活動を取り入れている。そのため、日常会話から生徒に筋道を追って話をさせる指導を徹底しており、教師は「いつ、どうして、なぜ」を意識して生徒に問い掛けるようにしている。また、定期考査では、全教科において論述問題を必ず1題以上出すことが決まっている。考査後、教科ごとに正答率、解答率、無解答率を算出・分析し、授業の改善に役立てている。

◎日々の授業でも3年間を通して「ことば」にこだわる

同校では、日々の授業でもグループで話し合ったり、他者に説明したりする場面を意図的に多く組み込んでいる。数学の宿題も「他人に解説できるレポート」として提出させる。そうした取り組みでは、必ずしもその教科の成績上位者が良いレポートを書くとは限らず、じっくり考えることが出来る生徒が良いレポートを書くということも分かったという。

各教科、授業の要所で「なぜ」を意識的に問い掛けたり、生徒による発表の機会を設けたりすることを重視した言語活動を3年間を通して行うことで、進学面では推薦入試やAO入試だけでなく、一般入試でも合格実績が向上している。また、中学校の教師が同校で学ぶ生徒の姿を見て、「中学時代よりも積極的に自分の意見を述べている」と驚くことも少なくないという。

2010年10月号「新課程への助走」で
同校の取り組みを紹介しています

は目立たなかった生徒が、リーダーシップを発揮し、他の生徒に一生懸命教える場面もよく見られます。そういういった生徒の成長、変化を見ると、本来生徒はいろいろな可能性を持っている、言語活動はそれを引き出す仕掛けになっているのだと実感しています。

樋口 講義型の授業では目立たなかった生徒が、言語活動の工夫によって活躍できるというのは重要な気付きですね。言語活動を通して自己肯定感を高めたことをきっかけに、他の場面での成長を促すことも期待できそうです。

有木 そうですね。実際、面談などで生徒の成長をほめた上で「苦手なこの教科も頑張ってみてはどうだいい？」などと声を掛けることがよくありますが、そんな時は特に、生徒はこちらの言葉に耳を傾けてくれます。そうしたやりとりが出来るチャンスが増えたことも、言語活動の間接的な成果です。

指導技術を共有し 学校の文化として根付く

談議所 生徒の成長を目の当たりに



「『暗記は学習ではない』という言葉が、本校の合言葉になっています。身に付けた知識を言語活動を通して活用することによって、大学や社会で役立つ本当の学力になるのだと思います」
談議所

すると、教師は生徒の自由な発想を信じて、それを待てるようになります。授業中、テーマを与えて生徒同士で考える時間を一層大切にすることでなく、生徒の意見を生かして授業を展開しようという意識が本校では教科を問わず強くなっていると思います。

樋口 言語活動を重視することで、生徒を中心とした授業スタイルが校内で標準化しつつあるということですね。しかし、そうになると、学習内容が増えた新課程において、いかに知識を習得しながら生徒主体の活動を維持していくのが、学校全体の課題になってくるのではないのでしょうか。実際、新課程になってから、現実には「活用」よりも「習得」に時間を割かれるようになったという現場の声も聞きます。

談議所 確かにそういった難しさはあります。ですから、単元のどこで生徒主体の活動を重視し、どこで知

識習得を重視するか、バランスを考えた取捨選択が重要です。また、生徒の主体的な活動の時間を確保するためには、板書内容の精選やICTの活用などによる授業のスリム化が必要でしょう。本校では、校内に10

台あるプロジェクターはいつもフル稼働している状態ですし、生徒も授業でICTを活用することは当たり前のことと受け止めています。そうした教科指導での工夫を教師間で共有し、自校の指導メソッドとして確立することが重要だと思っています。

有木 本校では、年2回「研究授業ウィーク」を実施し、そこで全教師が言語活動を取り入れた授業を互いに見せ合い、指導スキルの向上につなげていきます。また、新しく本校に赴任した教師は、1年目に必ず公開研究授業に挑戦することになっています。もちろん最初は戸惑いますが、他の教師からアドバイスを受けながら、「忠海高校に来たら、言語活動

に力を入れるのだ」ということを理解してもらい良い機会になっています。

言語活動を土台とした 取り組みが大学でも始まる

樋口 高校で言語活動が活発化しているように、大学でもここ数年、従来の講義型の学習とは異なる、学生の主体的な活動を重視した学習が広まっています。それは、ディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションを取り入れた授業、更にPBL (Project-Based Learning) と呼ばれる課題解決型学習などであり、まさに言語活動を土台としたものです。また、それらは総称してアクティブラーニングと呼ばれています。2012年に中央教育審議会・大学分科会がまとめた「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）



では、予測不可能なこれからの社会を生き抜くためには、課題を発見し、解決の道筋をロジカルに考え、チームワークやリーダーシップを發揮して最適な解を皆で考える力が必要だと明記されています。ベネッセ教育総合研究所の調査でも、グループワークやディスカッションなどを経験する学生は着実に増えていっています(図1)。各大学で、今後不可欠な力を身に付けるために必要な活動として、アクティブラーニングが位置付けられているのです。

談議所 大学教育のあり方が我々の時代とは随分変わってきていることを私も理解していますが、アクティブラーニングが広く普及してきているなど、その変化は私たち高校教師がイメージするものよりも、もしかすると大きなものかもしれませんね。

「言語活動はクラスメートや教師の存在が初めて初めて成立するものです。つまり、教師にとっては指導技術の発揮のしどころなのです」有木

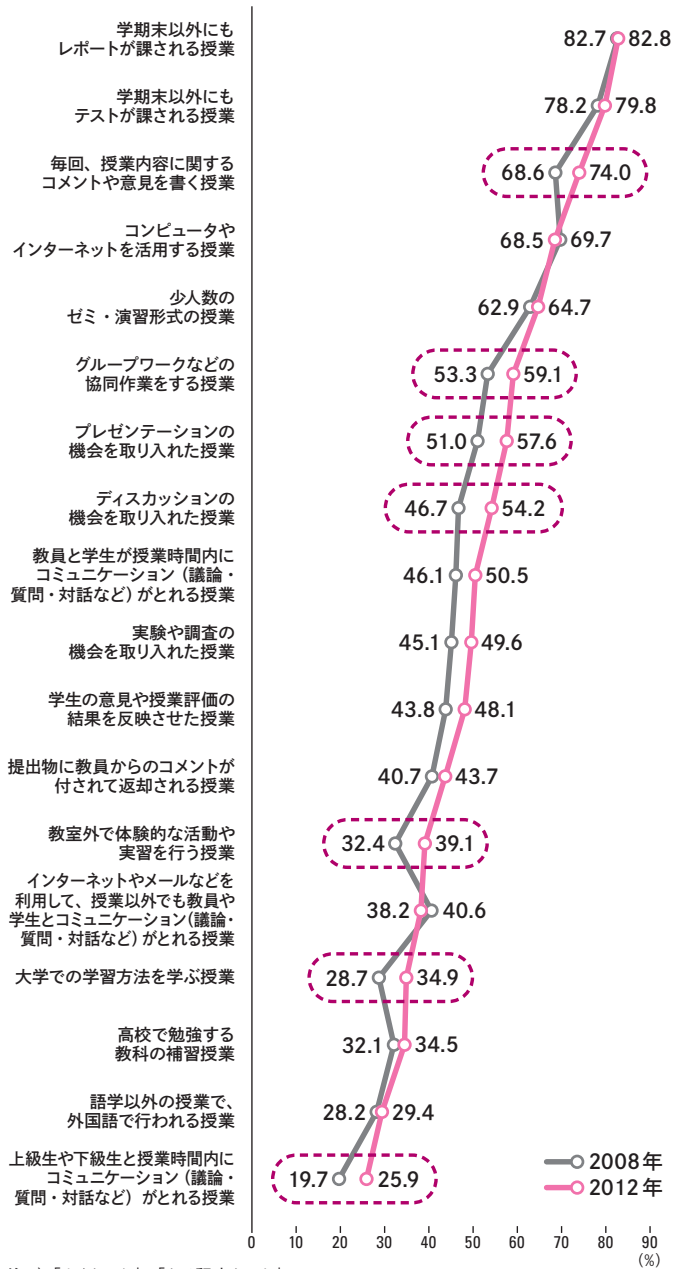
有木 確かに最近、卒業生から「大学でも、体験型の授業やディベートなどが行われている」と聞くことが増えたように思います。しかも、1年生のうちからアクティブラーニング

グを経験し、課題発見力や解決力の基礎を早期に身に付けさせようとしているように感じます。

樋口 これまでの伝統的な大学教育では、1・2年次は教養教育が中心

で、3年次以降になって初めてゼミなど少人数のアクティブラーニングが行われるといった状況でした。しかし、最近はそうしたモデルが変わってきており、1年次からアクティブラーニングを積極的に取り入れる大学もかなり増えていきます。その背景には、学びの目的が不明確な学生、社会経験の不足から学びの意義を理解できていない学生の存在が

図1 授業経験の経年変化



注1) 「よくあった」+「ある程度あった」の%
 注2) 経年比較については、2008年から5ポイント以上の違いが見られたものを破線で囲んだ
 出典: ベネッセ教育総合研究所「第2回 大学生の学習・生活実態調査」(2012年11月)
 対象: 全国の大学1~4年生 4,911人(留学生、社会人経験者を除く、男性 2,791人、女性 2,120人)
 調査方法: インターネット調査

図2 「主体的な学習を促す授業」の経験状況別に見た授業に対する取り組み方

	グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションの機会を含む授業の経験		
	全て経験	どれか経験	未経験
授業でわからなかったことは先生に質問する	43.4%	> 32.8%	26.0%
クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	34.1%	> 21.2%	13.4%
グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	67.3%	> 47.9%	> 32.6%
グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	60.1%	> 43.2%	> 28.3%
グループワークやディスカッションでは、進んでまともな役割をする	38.8%	> 27.6%	18.1%
グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	69.7%	> 55.3%	> 36.5%
授業に興味をもったことについて自主的に勉強する	70.0%	> 57.8%	48.4%
授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	67.2%	> 55.4%	47.3%
グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	53.4%	44.2%	> 29.3%
資格や免許の取得をめざして勉強する	68.4%	59.9%	> 49.0%
計画を立てて勉強する	51.7%	42.0%	> 29.4%
自分の意思で継続的に勉強する	67.2%	> 56.9%	> 46.5%
できるかぎり良い成績をとろうとする	79.2%	74.9%	> 64.6%
卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む	57.3%	48.7%	> 36.9%

注1) 授業への取り組みについては、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の％
 注2) 「グループワークなどの協同作業をする授業」「ディスカッションの機会を取り入れた授業」「プレゼンテーションの機会を取り入れた授業」の項目全てについて、経験が「よくあった」または「ある程度あった」とした回答者を「全て経験」と分類。全てではないが、いずれかの項目に経験のあった回答者を「どれか経験」と分類。全ての項目に経験のない回答者を「未経験」と分類。図3においても同様である
 注3) 「全て経験」と「どれか経験」、「どれか経験」と「未経験」を比べ、いずれか10ポイント以上の比率差があれば>で示し掲載。記号の向きは数値の大小を示す
 出典/ベネッセ教育総合研究所「第2回 大学生の学習・生活実態調査」(2012年11月)

あります。1年次からアクティブラーニングに取り組むことで、そうした学生の学びに対するモチベーションを高めようという狙いもあります。実際、アクティブラーニングを経験した学生は、その後、大学での学びに主体的な態度で臨み、授業以外の自主的な学習時間も増える傾向にあることが分かっています(図2・3)。

有木 本校の生徒も、志望大を検討する際には、その大学がどんな教育を行っているのか、関心を持って調べています。志望理由書に「この大学は、ディスカッションや校外学習をカリキュラムに多く取り入れているから」と書く生徒もいます。高校の授業で言語活動に取り組んだことが土台になって、進路選択の場面でもそうした活動に関心を寄せるよう

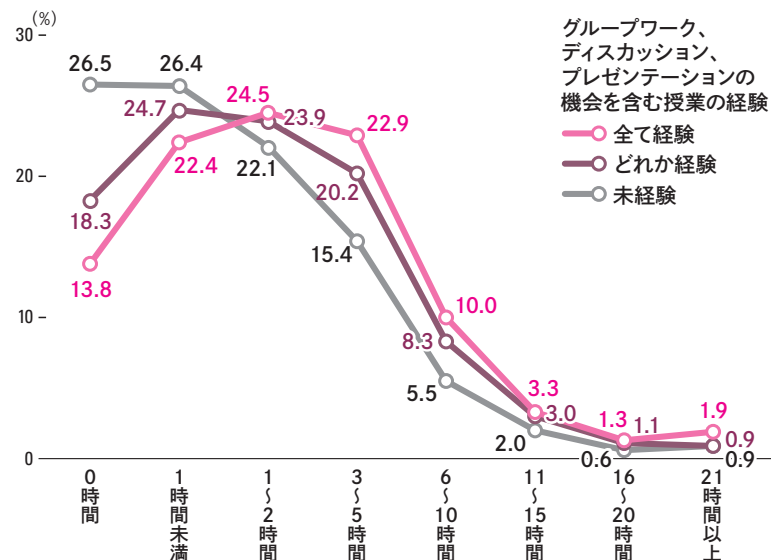
になったのでしょうか。

社会で今後求められる力を言語活動で養う

樋口 日本は、世界の中でも「課題先進国」であると言われていると思います。それは、少子高齢化が進む中、環境や福祉、医療などさまざまな分野で、今後世界が直面するであろう課題に、いち早く向き合っているからです。そんな日本の社会を、他者と協働しながら支えていく力の育成が高校や大学に求められており、それは高校までの言語活動、そして大学でのアクティブラーニングで養うことが出来るのではないかと、私は思っています。

談議所 生徒が答えが1つではない課題に向き合うためには、身に付けた知識を最大限に

図3 「主体的な学習を促す授業」の経験状況別に見た、授業の予習復習、課題に取り組む時間(週あたり)



出典/ベネッセ教育総合研究所「第2回 大学生の学習・生活実態調査」(2012年11月)

応用できる汎用力が必要であり、そうした力は、知識偏重型の授業からではなく、クラスメートや教師と語り合いながら学ぶ言語活動のような時間を通して身に付くものでしょう。実は本校では最近、教師の間で「暗記は学習ではない」という言葉が、学校全体のキャッチフレーズのように語られています。知識の暗記だけで終わらず、知識を活用して到



達する理解があつて初めて、本当の学習になり、大学や社会でも生きる学力になるのだと思います。

有木 ほとんどの生徒は社会に出た時に、何らかの形で人とかがわかる事に就きます。自分の言いたいことを相手に伝え、相手の考えを適切に読み取ることが出来なければ、仕事できつと苦勞することになるでしょ

う。言語活動を通して考える力、伝え合う力を身に付けさせることは、どんな進路を選ぶとしても必要なことであり、生徒を送り出す立場としての責任だと言えるでしょう。

樋口 社会で求められる力がこれま
でと違ってきているということとを、先生方も日々の指導や校務の中で実感することはありますか。

談議所 考えてみれば、私たちの仕事でも、最近協働の重要性を強く意識する場面が多くなっています。アンテナを高く張って、他の先生がどんな指導をしているか、教科の枠を超えてお互いに学び、高め合うことが教師の世界でも大切になっていきますよね。

有木 生徒たちが言語活動を通して考える力、表現力を身に付けるのであれば、私たち教師もそうした力を意識して高めていかなければいけないという雰囲気は校内には醸成されています。職員室や廊下でのちょっとした雑談を大切にするようにしたのは、語り合うこととお互いが高まることを教師自身が理解している

からだと思えます。

生徒が主体の活動だから 指導力の更なる向上が必要

樋口 今後、言語活動を更に充実させていく上で、課題とお感じになっていることはありますか。

談議所 言語活動で生徒たちが学びに対して主体的になるのは、大きなメリットです。だからこそ、私たちは生徒の楽しそうな表情だけで満足するのではなく、学習の狙いをしっかりと押さえた指導計画を立て、それを実践し、生徒にどんな力が付いたのか、その成果を冷静に分析する必要があります。活動の主体は生徒に置きつつ、活動の意味や目的をばやけさせないよう、活動を体系化する力が教師には求められると思います。

樋口 大学でも、アクティブラーニングを通して汎用的な力を伸ばすためのカリキュラムの体系化は、今後更に進んでいくでしょう。高校と大学が連携し、7年間を通じてどう育成するかを検討する場面も今後必要になってくるかもしれませんね。

有木 教師の指導力向上は、言語活動においても重要な課題ですよね。極端に言えば、知識の習得はその気になれば生徒個人の努力でも何とか

なるものですが、言語活動など知識の活用は、クラスメートや教師の存在があつて初めて成立するものです。だからこそ、学びの環境は教師が指導技術を発揮し、意図的につくられるべきものだと思います。

樋口 アクティブラーニングを経験することで、学習や社会の課題について議論する友だちの数が増える傾向にあることは、私たちの調査からも明らかになっています。学校、クラスという集団を豊かなものにするためにも、言語活動の充実は大きな意味を持つのだと思います。

有木 いろいろな意見を聞くことで、周囲の人々の存在価値に気が付き、他者を受け入れることが出来るようになるでしょうね。

談議所 生徒が他の人の意見を聞き、協働したくなる必然性をどうつくるか、私たち教師の力が問われているのだと思います。